
バカとテストと召喚獣 'A'nother

クロミック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 - Another

【Nコード】

N2355L

【作者名】

クロミツク

【あらすじ】

自分のテストの点数で強さが決まる、召喚獣をバトルさせることのできる、

試験召喚システムが導入されている文月学園。

これはとある、観察処分者、の日常を描いたものである。

明久を中心としたラブコメ？コメディ？シリアス？です！

もしこんな展開だったら？ということを考えています！

原作とはかけ離れるかもしれませんが基本的に設定は同じです！
よかったら見てみてください！

秀才と観察処分者

「ふう……」

久保利光は人通りの少ない通学路を歩いていた。

「明日は生物と国語か……」
手帳を閉じ、ふと前を見てみると、そこには一人の学生と幼い少女が何やら話していた。

「あれはたしか……」
学園一の問題児……

名前は、吉井……明久だったかな。

「それにしてもいったい彼は何をしているんだ？」

考えていると、彼はこちらに歩いてきていた。せつかくだから聞いてみようか。

「今日は、吉井くん。」

「今日は。久保くん……だよな？」

彼が僕の名前を訪ねる様に聞く。

「ああ。久保利光さ。トツシーとも好きな風に呼んでくれても構わない。」

ふふっ、と彼は笑った。

「なーんだ。久保くんって意外と面白い人だったんだね。」

吉井くんは続ける。

「ほら、眼鏡掛けてて勉強できる人って、頭が固そうなイメージがあつて。」

「ははっ。よく言われるさ。自分ではそんなつもりはないんだけどね」

「久保君は面白いね。うん。」

「ありがとう。ここで会ったのも何かの縁さ。これから宜しく。」

「こちらこそ。学年次席とまで言われている久保君と友達になれて嬉しいよ」

「ありがとう。ところでさっきはどうしたんだい？何か話していたみたいだったが」

「うん…それがかくかくじかじかだね」

「成る程、見知らぬ少女のためにぬいぐるみを買ってあげたいというわけか」

「そうなんだけど…ゴメン、久保くん、今お金あるかな？」

「生憎昨日使ってしまったばかりで…」

「そっか。それじゃああの計画で行くしかないか…」

「計画？」

「今日の持ち物検査でとられた恨みを鉄人にぶつけてみようかと思つてね。」

鉄人…西村先生のことか。「…それは危険じゃないかな？あとそれでどうやってぬいぐるみを買うつもりだい？」

「危険なのは当たり前だよ。あの鉄人だもん。」

没収されたのが運悪くゲーム機でね。それを売ってみようと思うんだ。多分それで買えるんじゃないかと。」

「いいのかい？ゲーム機は結構な値段すると思うけど？しかも知らない少女に？」

「僕よりもその子の方が大事だよ。ゲーム機なんか買い直せば」

僕は吉井くんに素直に感心した。

人のことをしつかり思いやってやれる人は多くはない。彼は善意どころか、それが普通と思っているのだ。

僕は…彼に何かできることはないかと訪ねた。

「久保くんの手を煩わせるわけには行かないよ。良かったら勉強を今度教えてもらえないかな？」

「構わないさ。何時でも言ってくれ。」

その後、集会で吉井くんが「観察処分者」と認定された。

秀才と観察処分者（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

勉強中（前書き）

更新遅いかもです。

勉強中

ピンポン。

「はいはい、今開けまーす！」

ドアを開けると、いつものように久保くんが立っていた。

「やあ、吉井くん。今日もお邪魔するよ。」

「観察処分者」に認定された後、僕や久保くんの家で勉強会を行っていた。

雄二たちに話したら、とても驚いていた。

そして「お前はその道に目覚めたんだな…」と言われた。一体どういう事なんだろう？

「今日は…理系の科目から始めようか。」

「はいはい。」

久保くんは教えるのが上手だと思う。頭の悪い僕でも直ぐにその問題が解けるようになる。

久保くん曰く僕の物わかりが良いと言っている。そういう謙虚な所が、久保くんの良いところだ。

ピンポン。

本日2度目のチャイムが鳴り響く。今日はガス代集金の日だったかな？

「ちよつと行ってくるね。」

玄関へ小走りで向かう。

「はいはい。い。ぢぢぢぢぢぢ」

そこに、いたのは、

勉強中（後書き）

ご意見感想お待ちしております

ドアを開けるとそのドアは（前書き）

今回はちょっと長めです。

ドアを開けるとそこには

「姉さん……だよな？」

そこには海外にいるはずの、僕の姉の姿があった

「はい、そうですよ アキくん。」

バスローブ姿の。

何でだ？何故ここに姉さんが居るんだ？今海外にいる筈ではないのか？

母さんから姉さんがくると言う連絡は無かった。

何故だ？生活態度を見に来たのか？いや、そんなことより

「何でバスローブ姿なのさっ！？」

「？弟と久々に会うのですから悪くない格好でいようと思ったからですよ？」

「いやいやいや、その服装はおかしいから。」

さて、姉さんを追い払える方法は無いものか…

「ああ、そう言うことですか、アキくん。入るならメイド服をお隣から借りてこいと。」

今すぐ中に入ってもらおう。このまま外に放置したら大変なことになるそうだ。（僕の評判やら何やらが）

そんなことを考えていると、廊下から足音が聞こえて

「そういえば久保くんがいるんだった！姉さん！他の服に着替えて！」

「メイド服ですね？わかりました。今お隣から借りてきます。」

「いや、メイド服がごくふつ々の家庭にあると思わないで！あとそんなことしたら僕が社会的に死んでしまうから！」

そうこうしている内に久保くんが歩いてきて、

「どうしたんだい？吉井くん。何かあったのか…い？」

久保くんが何度も目を擦って確認している。

そりゃ驚くよね。家の中じゃなくて外にバスローブ姿の人がいたら。

「あら、アキくんのお友達ですか？」

初めまして、アキくんの姉の吉井玲です。愚弟がお世話になっております。」

「い、いえいえ、僕は久保利光です。お邪魔させてもらっています。」

そうですか、と笑って返し、姉さんはこっちにやってきた。

「で、久保くんとはアレな関係ですか？」

「何でそうなるのさ！？普通の友達だって！」

「まあそんなことは置いといて」

「え！？話振ってきたの姉さんだよねえ！？」

近くで久保くんが顔を赤くしていた。…うん、鳥肌がたったのは気のせいだよね。

「アキくん。聞きましたよ。「観察処分者」に認定されたとか。」

「うぐ…」

これに関しては言い返せない。鉄人の本を売ってしまったのは事実なのだから。

「で、でも吉井くんは女の子のために」

久保くんが僕をフォローするように言ってくれる

「女の子」と言いましたね？久保くん？」

「え？はい、そうですが…」

ガンガン ガンガン

頭の中で警報が鳴っている。これはマズイ。マズイぞ吉井明久。

「アキくん？不純異性交遊は禁止したはずですよ？全く。」

「いや、でも若い女の子を放っておくわけには…」

「しかもアキくんは幼女に手を出したんですね。

年上の姉のような人なら構いませんが、それはいけませんね？お仕置きです！」

「いや、ツツコミ所満載なんだけど！」

「アキくん、目を、閉じて…？」

「いやいや、なんでそこで僕に顔を近付けてくるの!？」「お嫁に
いけなくなるチュウをするからですけど？」

「何する気!？実の弟に一体何する気なの!？」

「大丈夫だ吉井くん。僕が君を嫁にもらうよ／＼」

「いや、僕は男だからお嫁に行ったりはしないからね!？」

何だろう、寒気や鳥肌がたつてばかりだ。

「大丈夫です。お嫁にいけなくなるのは姉さんですから。」

「ちつとも大丈夫じゃない！それならやめてよそんなお仕置き！」

「アキくんにはお嫁にいけなくなった姉さんに罪の意識を背負いながら今後の人生を送ってもらいます。」

「何て陰湿なやり口だ！」

そんなこんなで、姉さんが帰ってきた。これからどうなることやら

……

ドアを開けるとそこには（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

試験1ヶ月+試験前(前書き)

バカテスト考え中です

試験1ヶ月＋試験前

姉さんが帰ってきてから、僕は勉強の毎日だった。

帰ってきては復習、問題を予習。昔の僕にはきついことであったが、教えるのが上手い久保くと頭が良い姉さんが居たので、勉強は苦と感じなかった。

「姉さん、夕飯はどうしようか？」

「夕飯…ですか？」

久保くんが来るならアキくん、自慢の腕を振るってあげたらどうですか？」

「そうだね、自慢ってほどじゃないけど。」

「良いじゃないですか。アキくんは私よりも料理が上手いんですから。」

「姉さんと比較されても意味がないいたいその関節はそっちには曲がらないって!!」

笑顔で腕の関節を決めてくる。これが、口は災いの元、ってやつか。

「……よしっ。ここまでしよう。」
振り分け試験前日の夜、僕は姉さんと久保くんが作った試験対策プリントを暗記していた。

「そうだね。前日は根を詰め過ぎても良くないだろうからね。」
久保くんもペンを置いて言う。

あれから僕は、久保くんと同じくらい勉強できるまでになっていた。

「それにしても驚いたよ。明久くんがここまでやるとはね。」

「久保くんや姉さんのお陰だよ。今までの僕は自分からやるなんてこともなかったんだから。」

久保くんには本当に感謝している。言葉では言い表せないくらいに。

「後は明日、自分の力を出すだけだよ。」

「久保くんも頑張つてね。僕は応援するからね。目指せ、学年首席!!!」

「ははっ、有り難う。頑張ってみるよ。」

明日はとうとう振り分け試験。久保くんと一緒になれば良いかな

… Aクラスに入れればだけど。

「っと、そろそろ寝るか。」

たくさん寝ておけば、テスト中に眠くなることはなさそうだ。

さて、明日は頑張りますか！

試験1ヶ月＋試験前（後書き）

ご意見感想お待ちしております

試験後・・・クラス分け

振り分けテストも終わり、今日はクラス分けの日だ。

久保くんや姉さんとしっかり勉強してきたから、いい成績が出る筈…

そんなことを考えていると、秀吉がこちらに歩いてきた。

「おはようじゃ明久。」

「おはよう、秀吉。今日も可愛いね。」

「ワシは男と言っておるうに…」

いつ見ても思うが、秀吉は男という性別じゃなくて、”秀吉”という性別だと思う。

「それにしても今日は早いう、明久。いつもは遅刻寸前に来るのに。」

「今日は久保くんと待ち合わせをしていてね。それこそ秀吉こそ早いじゃないか、演劇部の朝練かい？」

「ワシはいつもこの時間じゃぞ？……と言いたいのじゃが、姉上に叩き起こされての。」

「ははっ。秀吉も災難だね。」

秀吉と話していると久保くんがやってきた。

「おはよう、明久くんに木下くん。今日はいよいよクラス分けだね。」

「ワシはFじゃろうな…」秀吉がため息をつきながら言う。

「僕は…どうかな。今回は頑張ったし。」

「久保くんなら大丈夫だよ！霧島さんを抜いてトップでもおかしくないさ！」

「ははっ。ありがとう。」

「明久はどうだったんじゃ？」

「観察処分者になって以来、嫌でも勉強してきたからね。良いとこ

るまでいったよ。20問に19問は解けたし」
自分でも無我夢中だといっていたのでどうだったかはわからない。
「ほほう。その調子ならAクラスかもしれないな。」
「いやいや、そんなうまくいくわけないって」

「あ、西村先生。おはようございます。」

「「おはようございます」」

「おう、おはよう久保に木下弟。それに吉井も早いじゃないか」

「最近遅刻しないように起きて（起こされて）いますからね。」
校門の前にいるのは生活指導の鬼こと、西村教諭だ。目をつけられるとろくな目にあわない。

「うむ。最近の吉井は素行も良くなってきているからな。少しは見直したぞ」

「いやいやそれほど・・・」

「ミジンコぐらいにな」

「それ絶対褒めてませんよねえ！？可愛い生徒になんていい草だ！」

「吉井、勘違いするな。」

西む 鉄人がこつちを振り向く。

「お前は不細工だ」

「そこまで言われるとかわ思わなかったよ畜生！」

うん、鉄人が教師じゃなかったら今頃キレているに違いない。

「じゃあお前らにクラス分けを伝える」

そういつて鉄人は僕らに封筒を渡す。

一応頭を下げて受け取る。中には一枚の紙が入っているようだ。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？掲示板とかで大きく張り出せば良いのに」

「普通はそうするんだけどな。まあ、ウチは世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験こうだからな。」

この変わったやり方も、その一環つ訳だ」

「ふーん。そういうものですかね」

適当な相槌打ちながら封筒に手をかける。さてさて僕はどこのクラスなんだろう？

秀吉と久保君は・・・やっぱりFクラスとAクラスか。

秀吉も勉強すれば出来る気がするんだけどなあ

なかなか封筒が空かない。仕方ない。上を破るか。

よし。これで見れる。さてさて、僕は・・・

その紙には、アルファベットが一文字。

「A」

こうして僕は、Aクラスとなった。

試験後・クラス分け（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

Aクラスにて（前書き）

感想ありがとうございます。これからの励みにさせていただきます。

Aクラスにて

「ここが…Aクラス……」

僕は今”2 A”と書かれた札が下がっている教室の前にいる。

何故だ、僕の紙にはなぜAの文字が書かれている？

考える、吉井明久。考えるんだっ！………

………（考え中）………

「はっ！これはまさか新手的ドッキリか！？扉の向こうには熱湯が用意されているのか！？」

「取り合えず落ち着こうか明久くん。ここから中が見えるから、それはないと思うよ。」

「いや、一步踏み出した瞬間、床が外れてまっ逆さまに下に落ちて熱湯で違いない！！おのれ、卑怯だぞ！犯人！！姿を現せ！！」

「君はどれだけ混乱しているんだい………」

数分後、落ち着いた僕は中へ入っていった。

そこは普通の教室とは別世界だった。

黒板の代わりにプラズマディスプレイ、各種飲料やお菓子が入っている冷蔵庫、個人用エアコン、リクライニングシート。

この一人分だけの設備で僕の家を遥かに上回っている。

「ここは本当に教室なのか……？」

「うん…これは凄いよね……」

久保くんまでもが圧倒されている。

しばらくすると、一人のきれいな女性

高橋先生が入ってきた。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこのクラスの担任、高橋洋子です。よろしく願います。」

彼女が告げると、そのディスプレイに先生の名前が表示された。これからの授業もこんな感じなのだろうか？

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他に不備のある人はいますか？」ふと、紅茶の香りが漂ってきた。早速支給された設備を使って入れたのだろう。

「では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

名前を呼ばれて立ったのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような少女。

クラス代表　つまりこのAクラスの代表「学年主席、ということである。」

「……霧島翔子です。よろしく願います」
才色兼備とはこのことだろう。周りの男子だけでなく女子までもが霧島さんに見とれている。

「Aクラスの皆さん。これから1年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる”戦争”で、どこにも負けないように。」

こうして、僕の二学年目は始まった

Aクラスにて（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

その頃のFクラス(前書き)

バカテス for mixi 面白いですよね。

その頃のFクラス

「です。一年間よろしく願います。」
つと、これで自己紹介は全員終了か。49人しかいないが、きっと明久が遅れているのだろう。
と、その時ポロポロの扉が開き、息を切らせて胸にてを当てている女子生徒が現れた…女子生徒？
「あの、遅れてっ、すいません……」

誰からというわけでもなく、教室全体から驚いたような声上がる。
どういうことだ？明久が遅れているんじゃないのか？
しかも、この女子は……

「丁度良かったです今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願います。」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしく願います……」

「はいっ！質問です！」

「あ、はい、なんですか？」

質問されて驚く姫路。普通自己紹介ですぐに質問するやつはいないだろう。

「何でここにいますか？」

聞きようによつては失礼な質問が浴びせられる。

だがそれは俺も聞きたい。どうして学年2位を記録した姫路がこんなところに来たのか。

「その、振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…」

成る程、そういうわけか。たしか途中退席は0点扱いだからな。

「姫路、俺は坂本だ。坂本雄二。一応代表だ。よろしく頼む。」

「あ、姫路です。よろしく願います。」

軽く挨拶を済ませると、姫路は空いてる席に座りにいった。
……姫路か。面白いことになったな。学年一桁の姫路がいれば、ど
うにかなるかもしれないな……

「では坂本君。自己紹介代表の挨拶をお願いします」

「了解」

俺は返事をし、教壇に上がった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きな
風に読んでくれ。」

さて、まずは全員を動かすとするか。

「さて、皆にひとつ聞きたい」

こうして俺は、Aクラス戦争への引き金を引いた。

ん、待てよ……明久は、一体どこへ行ったんだ……？

その頃のFクラス（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

Dクラスに宣戦布告後（前書き）

誤字脱字等あったら指摘してくれるとありがたいです。
それではごうそ。

Dクラスに宣戦布告後

宣戦布告が終わり、廊下を歩いていて、ふと明久のことを思い出した。

あのバカはどここのクラス」に行ったんだ？

EやDクラスにいるわけでもなく、まったく姿が見えない。

「あいつがまさかAクラス？・・・なんてことは無いよな・・・」

確かに最近は忙しく勉強していた気がする。

秀吉にでも聞いてみるか。

「秀吉！明久は何クラスか知ってるか？」

小柄な体がこちらを振り向く。こいつ男には見えないよなあ・・・

「明久か？あやつはAクラスじゃぞ」

「何を言っているんだ秀吉？あいつがAクラスな訳がないだろう」

「残念ながら本当じゃ。わしもこの目で”A”を見てきた。」

……そういうことか。やっと状況を理解した。

「そうか・明久は”A”HOKラスか・新しいクラスが出来る程だめだったか」

「お主の思考はたまに明久以下になるようじゃな……。明久はエリート
のAクラスじゃぞ。」

どうせなら行ってみるかの？」

「そうだな。そのほうが早い。行くぞ、秀吉。」

「了解じゃ。」

次の授業の準備をしていると、教室に美少女と悪友が入ってきた。
「あれ？雄二に秀吉、どうしたの？」

「本当にAクラスか…」

雄二が人の顔を見るなりため息をつく。失礼な。

「まあ、お前がFクラスにいないんでどこに行ったかと思ってな
それともうひとつ面白いお知らせがある。

「へえ、いったい何をするんだい？」

一年もこいつの悪友をやっていたからわかる。絶対何かをたくらんでいる目だ。

「試召戦争じゃ。Dクラスに。しかも今日の午後じゃ。」

「いきなり初日にかい！？まあ雄二のことだから何か策があるんだろっけど」

「そういうことだ明久。明日には面白いことになってるぞ。」

「まあがんばってね雄二、秀吉」

「おう」

雄二たちはそれだけ話すと教室に戻っていった。

ん…霧島さんが二人のほうを見つめている。

ま、まさか秀吉狙い！？

秀吉の貞操が危ない！！

いやでも…それは百合だからいいのか？…

Dクラスに宣戦布告後（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております

校内放送（前書き）

PVアクセス10,000突破です。

ありがとうございます。

校内放送

放課後、明久はレモンティーを飲みながら予習をしていた。

「そういえばいま雄二たちはDクラスと戦争中かぁ・・・ちよつと見に行ってみようかな？」

そう思い、勉強道具を片付けていると、

ピンポンパンポン　　>連絡いたします<

校内放送・・・この声は須川君だったかな？

>船越先生、船越先生<

先生の呼び出し？…何か戦争にでもつかうのかな？

>吉井明久君が体育館裏で待っています。<

え？　僕は呼び出したりなんかしてないけど？

なんだか嫌な予感がする・・・

>生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです<

「んなわけあるかぁあああ！！！」

な、なんて危険なことをやってくれたんだ須川君！

生徒に単位を盾にしてまで交際を迫る船越先生だぞ！？このままじや僕の貞操が危ない！

と、とりあえず早く誤解を解かないと！

>左手の薬指を綺麗にして来ていてください、とのことですよ

……よし。須川君。僕は君を殺すことにするよ。ここまでしたら殺されても文句は言えないよね・・・？

そんな殺意を抱きながら、僕は誤解を解くために体育館裏に向かった。

校内放送（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

Fクラスは勝利より一日後

次の日の朝

教室は試験召喚戦争が始まったという話題でもちきりだった。

「聞いた吉井くん？最下位のFクラスがDクラスに勝ったんだって
！」

ボーイツシユな女の子 工藤愛子さんが僕に話し掛けてくる。

「うん、すごいよね。今の時期は点数差がもろにでて辛いはずなのに。」

「うーん……」

工藤さんと話していると、優子さんと霧島さんが教室の教壇の上に乗った。

「皆聞いて！私たちAクラスで、Fクラスに試験召喚戦争を挑もうと思うの！」

ざわ……ざわ……

教室内がざわめく。それもそうだ。何故下位のFクラスに試召戦争を仕掛ける必要があるんだろう？

説明が続けられる。

「2年になってまだ数日しかたってなくて、努力のしていないクラスが設備をあげたりするのはおかしいと思うの！」

本来なら頑張ってからこそ得るべきよ！」

それもそうだ。ここにいる全員、苦勞したんだ。

まわりの皆が頷いている。

「そんな訳で制裁措置を加えたいと思うんだけど、どうかな？代表。」

「…私もそれに賛成。雄二には少し反省してもらわないと。みんな、いくら下位とはいえ油断しないでね。」

こうして僕らはFクラスに戦争を仕掛けることとなった。

Fクラスは勝利より一日後（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

Fクラス戦？（前書き）

いつの間にか一週間近く空いてしまった・
遅くなってすみません。

Fクラス戦？

「では、一回戦を始めます。両クラス選手、前へ。」

Fクラスとの試召戦争は5対5で戦うこととなった。

こちらから出るのは優子さん、久保君、工藤さん、僕、霧島さんだ。

1回戦の相手は・・・秀吉対優子さんか。

うーん、秀吉には悪いけど優子さんの圧勝かな？

「早いところ済ませましょう？秀吉なんか話にならないんだから」

「姉上、ワシに勝てるんでも思っているのか？」

「つつ！秀吉の癖に！」

秀吉はなにやらたくらんでいる顔だ。
なんだか嫌な予感がする。

「では、始めてください。」

「試験召喚！」

数学

木下優子 376点

木下秀吉 301点

「えっ！？どういうこと！？」

「隙ありじゃ！姉上！」

優子さんが驚いている隙に、秀吉の召喚獣は突撃した！

何とか反応して避けたが、相当なダメージを負ったようだ。

木下優子 305点

木下秀吉 301点

「雄二や島田たちに教えてもらったら以外に出来たの。本当は最初の特攻で倒すもりだったのじゃ。」

秀吉がにやりと笑う。

「…どうやら舐めすぎていたみたいね。本気で行くわ！」

「ワシは姉上を越えてみせる！」

二人の攻防は10分以上続き、ついには秀吉が一撃を入れて勝利となった。

「ごめんね、みんな。負けちゃった・・・」

「…大丈夫、優子。私たちは勝つ。元気出して。」
霧島さんが優子さんを慰める。
「そうだ！まだ戦争は始まったばかりだ！」

「ありがとう、代表。吉井君たち、後は頼んだよ！」

「任せて優子さん！君のためにがんばるよ！」

「…っ！う、うん。がんばって！」

優子さんの顔が少し赤いような気がする。体調が悪いのだろうか？

つと、次は久保君の2回戦か。相手は…須川君か。まさか須川君も…？

「久保君！一応気をつけてね！」

「わかっているよ、明久君！最初から全力さ！」

「それでは、始めてください。」

「異端尋問会の本当の力を見せてやる！」
なにやら目つきが違う。これはまずいんじゃないかあ…？

「「試験召喚！」」

世界史

須川亮 87点

久保利光 389点

勝負は一瞬だった。

「俺の写真集入手は夢と消えた・・・」

須川君は悔しそうになにやらつぶやいていた。そのためか君は。

Fクラス戦？（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

Fクラス戦？（前書き）

ジュン。

Fクラス戦？

第三回戦は工藤さんと・ムッツリーニだ！

科目の選択権は向こうにあるから、間違いなく保健体育で仕掛けてくるだろう。

「工藤さん！敵は強いから気をつけて！」

「大丈夫だよ吉井君。ボクも保健体育なら誰にも負けないんだから！」

自信満々に言う工藤さん。あのムッツリーニに勝てるのだろうか？

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「……土屋康太。」

「科目は何にしますか？」

「……保健体育」

ムッツリーニの最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ？噂じゃ保健体育が得意みたいだね？」
妖しい笑みを浮かべて言葉を続ける。

「実はボクも得意なんだ。もちろん・実技でね」

胸がすごくドキドキした。まさか実技って……！？

「その君、須川君だよな？勉強苦手みたいだし、保健体育だったらボクと一緒に勉強しない？実技で。」

「は、はい！よろこんで」「これより異端尋問会を開く。」

須川君の周りに真っ黒い集団が現れる。ご愁傷様。

「罪状。被告人はFFF団会長でありながら女の子と保健体育を行うという規則違反を起こした。よって有罪。意義のあるものは？」

「……意義ありません」「……」

「ではコイツを連れて行け。」

「……了解」「……」

そういつて須川君は発言する暇も無く退場していった。

かわいそうに。明日は生きてるかなあ……？

そんなことを考えていると工藤さんはムツツリーニに切りかかっていた。

「バイバイ、ムツツリーニ君。」

召喚獣が大きい斧を振り上げた瞬間、

「……加速。」

「え？」

消えたと思ったムツツリーニの召喚獣は一瞬にして工藤さんの召喚獣を真っ二つにしていた。

保健体育

工藤愛子 446点

土屋康太 576点

工藤さん相手に100点差をつけるなんて……なんて奴だ。

これでもう僕たちには余裕が無い。あと一回で負けてしまうのだ。

「吉井。なんとしてでも勝ちに行く。全力でお願い。」

霧島さんが僕に言う。僕だって負けたくはない。

「わかってるよ、霧島さん。そっちも気を抜かないでね！」

「…もちろん。負ける気は無い。」

霧島さんが頷く。…さて、次は僕の番だ！

Fクラス戦？（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

Fクラス戦？（前書き）

たぶん明日更新すると思われます。

Fクラス戦？

「それでは第四回戦を始めます。両クラス選手、前へ。」

高橋先生の声で、一人の女生徒が歩いてくる。

「Fクラス、姫路瑞樹です。よろしくお願いします、吉井君。」

ピンク色の綺麗な髪をなびかせてきたのは、姫路さんだった。

「Aクラス、吉井明久です。よろしく、姫路さん。」

「科目は何にしますか？」

姫路さんが告げる。

「総合科目でお願いします」

「わかりました。」

総合科目のフィールドを作成するために、高橋先生は処理を始める。振り分け試験のとき調子が悪そうだったが、今の体調は大丈夫だろうか？

「姫路さん、熱はもう大丈夫かい？」

「はい、もう大丈夫です。あの時は本当にありがとうございました。」

「大丈夫ならよかった。遠慮せず本気で行かせてもらおうよ！」

「はい！私だつて負けません！」

そういつてこちらを見る姫路さん。どつやら簡単に勝てる相手ではなさそうだ。

「それでは、始めてください。」

かといって僕も負けるつもりは無い。僕らAクラスのために全力を出し切る！

「試験召喚！！」

Fクラス戦？（後書き）

ご意見ご感想、お待ちしております。
脱字などあったら指摘して下さいと助かります。

Fクラス戦？（前書き）

バトルシーンは苦手です・・
書いてたら日付変わってましたW

Fクラス戦？

二人の召喚獣がエリア内に現れる。

日本刀をたずさえた、学ランの召喚獣が現れる。
左腕には黄金の腕輪付け、相手を見据える。

総合科目

Fクラス 姫路瑞希 4409点

Aクラス 吉井明久 4132点

く・・・やはり姫路さんの方が点数が上か・・・
でも、負けるわけにはいかない！

「腕輪、「共命」発動！」

僕の召喚獣が緑色のオーラに染まる。

「いくぞっ！」

僕の召喚獣が姫路さんの召喚獣に突撃する。

姫路さんは僕に向かって大剣を大きく振り回す。

「その隙、もらった！」

日本刀の斬撃がヒットする。どうやら後ろに身をかわし、致命傷は避けたようだ。

「お返しです！」

腕輪から広い範囲にまばゆい光の光線が放たれる。

「あたるもんか！」

飛んでかわし、一度距離をとる。

一発あたれば即死のデットヒート。握る手に汗がにじむ。

Fクラス 姫路瑞希 2807点

Aクラス 吉井明久 3052点

「これで終わらせます！」

着地してすぐの召喚獣にありえない速さで大剣が突き出される。間に合うか!?

「くっ……」

右腕に痛みが走る。右腕にモロに当たったか・

まあいい。どうせ相手もダメージを受けるんだから。

「!?!? どうして私の点数が!?!?」

姫路さんの召喚獣の右腕には、僕の召喚獣と同じ傷がついている。

Fクラス 姫路瑞希 2307点

Aクラス 吉井明久 2002点

「それは僕の腕輪の能力さ。この腕輪は自分が受けたダメージの半分を相手に与えるんだ。」

腕輪の使用には50点必要。

今の姫路さんの攻撃は僕に1000ダメージ。相手にはその半分の

500ダメージ、ということだ。

「そんな能力があるなんて・・・」

「もつとも2回までしか使用できないから、あまり多用はできないけどね。それより・・・足元がお留守だよ！」

「えっ！・・・あっ！」

驚いている姫路さんの召喚獣に斬撃が当たる。

Fクラス 姫路瑞希 2007点

Aクラス 吉井明久 2002点

召喚獣の体制を立て直しながら、姫路さんは言う。

「私、負けるわけにはいかないんです！大好きなFクラスのために！皆のために！」

攻撃で傷を負ったはずのの召喚獣が、さっきより早いスピードで突撃してくる。

「僕だって、Aクラスの皆のためにも負けるわけにはいかないんだ！」

それに合わせ、刀を構えさせる。僕なんかのせいで負けたりはしたくない！

「はああああああ！」

「絶対に、負けない！」

お互いの剣と刀がぶつかり合う。

腕に激痛が走る、でも今は勝つことだけを考えるんだ！

二つの力がぶつかり合い、爆発するような光を放つ。

そして、最後に立っていたのは

Fクラス戦？（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

Fクラス戦？

日本刀を携えた、僕の召喚獣だった。

「勝者、Aクラス吉井明久！」

高橋先生の声で、周りから大きな歓声上がる。良かった、勝てたんだ。

「お疲れさま、吉井くん。見ているこっちがハラハラしたわ。」

「明久くん、怪我はないかい!？」

「お疲れっ 吉井くん。がんばってたねー。」

久保君、愛子さん達が声を掛けてくれる。

「…お疲れ様、吉井。あとは私に任せて。」

霧島さんが言う。これで2対2。次に勝てば僕らの勝利だ。

「うん、雄二はよろしくね！」

「…任せて。」

霧島さんが行った後、空いている椅子に座ると、身体中に痛みが走った。

「つつ…。」

フィードバックだけは仕方ないもんな…。」

「大丈夫？吉井くん？」

優子さんが僕を気づかつようについ。

「ボロボロだけど、なんとか。見ててくれたかい？」

「ええ。カッコ良かったわよ。惚れちゃうくらい。」

「ははっ、ありがとう。デートでもしてくれと嬉しいな。」

「考えておくわ。」

「それでは第5回戦を始めます。両選手、前へ。」

次は霧島さんだ。相手は雄二。

どんな手を使ってくるかわからない。

「代表が負けることはないと思うけど……。」

「科目は何にしますか？」

「日本史で。それも小学生レベル、100点の上限付きだ！」
会場内がざわめく。

小学生レベルの上限付き……つまりたった一つのミスで負けるとい
うことだ。

これは集中力の勝負。

必ず勝つてくれ……

Fクラス戦？（後書き）

ご意見感想お待ちしております

誤字脱字等ありましたら報告お願いします

Fクラス戦終結（前書き）

ただでさえ更新が遅いのに、テスト期間中は更新がさらに遅いです…
早く更新するようがんばります。

Fクラス戦終結

「それでは結果を発表します。Aクラス、霧島翔子」
「モニターに数字が表示される。」

97点

ざわ…ざわ…

「代表が満点を逃しただと!？」

「そんな、まさか…。」

「これで坂本が満点だったら…くっ…。」

これで雄二が満点だったら僕たちはFクラスと設備入れ替えとなってしまう。

「Fクラス、坂本雄二」

「固唾を呑んで見守る。いったいどうなるんだ…!？」

53点

雄二、君は何をしたかったんだい？

「三対二でAクラスの勝利です。」

「……雄二、私の勝ち。」

床に膝を着く雄二に霧島さんが歩み寄る。

「…殺せ。」

「良い覚悟だ！殺してやる！坂本お！」

「ちょっと須川よしなさい！あんたも負けたでしょ！？」

「ええい！離せ島田！俺は月に代わって喉元を引き裂くというお仕置きが必要なんだ！」

「セーラー ーンでもそんなことはしません！」

島田さんと姫路さんが暴れる須川君たちを止めている。

うん。僕もFクラスだったら雄二を殺しに行っただろうね。

「…ところで、約束」

そういえば宣戦布告のときに「負けた方は一つ言うことを聞く」なんて言っていたなあ。

何かやらせたいことでもあるんだろうか？

「わかっている。何とでも言え。」

「それじゃ 雄二、私と付き合って。」

言い放った。

・・・はい？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか。何度も断つただろ？」

「私は諦めない。私の好きな人は雄二しかない。」

えっと、つまり、初めから雄二のことが好きで、一途に思っていた結果、男に興味が無いつて風に噂されただけ？ 女の子が好きって言うのは雄二の近くにいる異性が気になったから？

「拒否権は？」

「…ない、今からデートに行く。」

「ぐあっ！離せ！やっぱりこの話は無かったことに

」

ぐいっ つかつかつか ゴスッ ギャアアア・・・

霧島さんが雄二の首根っこを掴んで去っていく。あ、机に小指をぶつけたようだ。

「時に明久。土曜日は暇かの？」

ふと秀吉が話しかけてくる。

「特に予定も無いけど？どうしたの？」

「うむ。せっかくじゃから勉強をおぬしに教えてもらおうと思っ
て」

今回数学は出来た秀吉だが、まだほかの教科の点は低いらしい。

「了解。優子さんも一緒にはどうかな？」

「姉上は了解済みじゃ。よろしくたのむぞ。」

「了解。それじゃあまた。」

各自のクラスの戻っていく。

こうして僕は秀吉の家で勉強会をすることになった。

「…秀吉！ちゃんと誘ってくれたでしょうね！？」

「もちろんじゃ。しかしまさか姉上が明久をのう……」

「／＼ば、ばか！／＼違うって言うてるじゃない！」

「赤い顔言われても説得力が無いのう。って姉上っ！その関節はそ
うちにまがらなっ………！」

Fクラス戦終結（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

また誤字脱字などありましたらご報告お願いします

姉と弟二人と勉強会（前書き）

テスト期間中のため、前回より長く間が開きました。
あと一日っ……。月曜でテストは終わるんだっ……。

姉と弟二人と勉強会

木下姉妹（弟）宅

「いらつしやい吉井くん。」

「待っておつたぞ明久。」

二人が出迎えてくれる。

「うん、今日はよろしくね。」

居間に通され、テーブルの上で教科書を広げる。

「明久はなにを勉強する気なんじゃ？」

「僕はとりあえず数学からやろうと思ってるよ。」

「じゃあ数学から始めましょ。三人とも同じの方が教え合いができるわ。」

「了解じゃ。」

勉強をしているといつの間にかお昼の時間となっていた。

「それじゃあ私がお昼ご飯作るわね」

優子さんが台所に向かう。昨日秀吉から昼は持ってこなくて良いといわれていたのはこういうことか。

「優子さんって料理得意なの？」

「普通の人と同じくらいだと思いますぞい」

姉さんは料理音痴だからなあ…ぜひとも優子さんを見習って欲しいものだ。

「吉井君、秀吉、出来たわよ！」

おいしそうなオムライスが出てくる。きれいで、形も整っている。

「いただきます。」

三人で食べ始める。ぱくつ。うんこれはおいしい！

「ど、どうかな？吉井君？」

「ここは素直に感想を伝えておこつ。」

「とってもおいしかったよ！優子さんをお嫁にもらう人がうらやましいよ！」

「／／あ、ありがとう」

何だろう、心なしか優子さんの顔が赤い気がする。熱でもあるのだろうか？

「秀吉、優子さんって体調崩したりしてない？顔が少し赤いんだけど」

「…おぬしは本当に鈍感じゃのう…」

何だろう。そのセリフを最近たくさん聞いている。そんなに鈍感じゃないと思うけどなあ。

ふと、棚に入っているゲームソフトに目が行った。アレは確か…

「ああ、昔やってたレースゲームか。なつかしいなあ、これ。」

マオのパッケージを眺める。前は雄二とかと一生懸命やってたっけ。

「あら、吉井君もやったことあるの？それ。」

「このゲームは得意なほうなんだ。優子さんは？」

「秀吉なんかに負けないくらい強いわよ 対戦してみる？」

「ふふつ、僕に勝負を挑んだことを後悔しないようにね！」

「おぬしら、勉強はいいのか？」

「息抜きだから、終わったら始める（わ）よ」「

「そつだといいのじゃが…」

1時間後

「無駄だよ、優子さんの腕じゃ、僕には勝てない。」

「くうーっ！何でなの！もう1回よ！もう1回！」

「ふふっ。何度でも受けてたつよ。手加減は必要かい。」

「いらないわよ！絶対に1回は勝ってやるんだから！」

「……」

2時間後

「なあ姉上。そろそろ諦めたら……」

「うるさいわよ秀吉！もうちょっとで勝てそうなんだから！」

「……優子さん、そろそろやめにしないかな？こんなに時間が経つてるし……」

「そんなこと言って、勝ち逃げなんてさせないわよ！次はもう絶対勝つんだから！」

「ワシはスーパーに買い物でも行ってくるかの……」

3時間後

「ねえ優子さん。」

「何よ。」
「グスッ」

「そんな涙目にまでなら無くても」

「少しは手加減してくれたっていいじゃない！」

「それは優子さんが言ったからでしょ!？」

「それでも手加減するの!ふつう!」

「まったくもって意味がわからないよ!？」

「ただいま…ってまだやっておったのか…。」

結局100戦とも僕が勝ってしまった。

「明久に勝てる訳なかるう。全国大会で一桁に上るほどの実力をもつとるんじゃないぞ?」

「そ、そうなの!？勝てるわけ無いじゃない!」

「そんな自慢できるようなことじゃないけどね。たまたま上位まで残れただけさ。」

「あの時は体調不良で準決勝を辞退しただけであろう?優勝していてもおかしくわなかったぞい。」

「吉井君って何者…?」

ただのゲーム好きです。

夕刻

「今日は楽しかったよ。勉強もできたし、遊ぶことも出来たし。」

「まあ誰かさんのせいで、午後はほとんどゲームしかしておらんかったからのう。」

「…次はしっかりするわ。」

「それじゃあ優子さんに秀吉！また月曜日！」

「また学校での〜」

「またね、吉井君」

次行くときは僕がお昼を作ってあげたいな。今回は優子さんにお世話になったし。

今度秀吉に言っただけでまた勉強会でも開いてもらおう。優子さんびっくりするかな？

そう思いながら、僕は鮮やかなオレンジの夕焼けを歩いて行った。

「何か違うわ」

「何がじゃ？姉上」

「私はそう、何か、甘い雰囲気になりたかったのよ」

「ゲームに熱中してては無理じゃのう。」

「うっ…まあそうだけど、何かいい案はないかしらね？」

「甘い雰囲気を求めるより、もう明久を誘惑したらどうじゃ？」

「ゆ、誘惑って／＼どんな風に？／＼」

「たとえば女体盛りとかはどうじゃ？」

「いや、いきなり飛びすぎでしょ」

「私をた・べ・て　　と言えばイチコロだと思っただけじゃが」

「うちの弟は頭がおかしくなったのかしら」

「でも無理じゃな、姉上のその胸じゃあ誘惑などにはならぬ痛い！
肩が外れる！ごめんなさ

い姉上！つい本音が！」

「厳しいお仕置が必要みたいねえ…？　ひ・で・よ・し」

「だからそんな方向には腕は回らないのじゃ！ごめんなさい！ほん
とにつ！このとおりじゃ！」

ギヤアアアア………叫び声だけがむなしく響いていった。

姉と弟二人と勉強会（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

水と塩とお弁当（前書き）

タイトルで1時間悩んでました

水と塩とお弁当

「ん〜っ！」

4時間目の授業も終わり、座り疲れた足を伸ばす。

今日は晴れていて、雲ひとつ無いいい空だ。

「そうだ。雄二とか秀吉とかを誘って屋上で食べようかな？」

天気の良い日はお日様の下、外で食べるのが一番だ。

僕はいつものを持ち、雄二たちのいるFクラスへ向かった。

「ヤッホー。雄二、秀吉、ムツツリーニ。一緒にお昼でも食べない？」

「おう、どうした明久？久保はいいのか？」

僕がドアを開けて声をかけると、真っ先に雄二の声が帰ってきた。なぜそこで久保君の名前が出てくるんだろう。

「久保君はともかく、このごろ皆と食事してないなあーなんて思ったり。」

「去年はほぼ毎日一緒に食べておったからのう。」

「…確かに久しぶり。」

秀吉とムツツリーニが頷くように言う。

「んじゃ屋上でも行くか。今日はちょうど天気も良いしな。」
雄二と思っただことは同じのようだ。このいい天気です外で食べなかつたらお日様がもつたないね！

屋上のドアを開けると、そこには二人の先客がいた。

「あれ？坂本たちじゃない。アンタたちもお昼を食べに来たの？」

「あ、こんにちは坂本君たち。」

「ああ。明久が久々にみんなで食べたい（仮）といってな。」

「雄二、（仮）ってどういうことだい？」

「いや、だつてお前の飯つて……塩と水だろ？」

「失礼な！最近砂糖どころか飴も食べてるよ！」

スーパーで30個入りの果汁アメをちよつと奮発して買って見た。これが本当においしくてたまらない。特にグレープ味。

「それって、食べるというより舐めてるだけですよね……」

「生活費をゲームや漫画にばかり費やしたからのう。少しでも回せばパン一枚くらい食べれるであらうに。」

それは僕だつてわかっている。発売する新作が多いせいだ！決して僕の無駄遣いではない！

「まあ、それはともかくだ。島田に姫路、良かったら一緒に食べないか？」

「いいの？坂本？」「良いんですか？坂本君？」

同時に二人が聞き返す。

「ぜんぜん構わないさ。大勢いたほうが楽しいだろ？
それに
明久の隣にも行けるぞ？」

「そつ、そうですね！一緒に食べましょう！」

「ウ、ウチも！一緒に食べましょう！吉井！」

二人がとも首を大きく縦に振っている。最後のほう雄二はなんていったんだろ？声が小さくて聞こえなかった。

「……あそこが丁度良い場所。良い風が吹く。」
ムツツリー二が端のほうを指差す。

「それじゃああそこで食べようか。」

僕たちはそれぞれ座ってお弁当を広げた。

「どろしてこつなつた」

僕が全員とのじゃんけんで負けて、ジュースを買って帰ってくると、

そこにはさっきまで話していたはずの5人の男女が倒れていた。泡を吹いたりしているものもいる。

「何があっただんだ…」

考えていると、秀吉の手元に紙切れが落ちていることに気づいた。

べんとうがや

べんとう？なぜ弁当なんだ！？まさか弁当に何かあるのか！？ふと真ん中にあるピンクのお弁当箱を見る。なんと、そこからまがまがしいオーラが出ているではないか！

「食べてこうなったのか…？いや、そんなちょっと食べるだけこんなことにはなったりしないだろう。」

僕は味を確かめるためにそのお弁当の中身を口に入れた
口
に入れたはずだったのだが、そこで僕の意識は途切れた。

目が覚めると

水と塩とお弁当（後書き）

「意見」「感想」おまちしております。

水と塩とお弁当？（前書き）

更新遅くなりました。

良かったら見てやってください。

水と塩とお弁当？

前から見慣れていた、ポニーテールの女子だった。

「あつ、吉井。目が覚めた？」

島田さんが近くにいた。そこは気を失ったときと同じ屋上だった。周りを見回すと、他の4人は居なくなっていた。

「他のみんなは？」

「先に起きて瑞希を運んでいったわ。…多分10分ぐらい前。ウチは吉井が起きるまで待つてたつて訳。」

「そっか…ありがとう、島田さん。起きるまで見てくれたんだね」
今は12時50分。ジュースを買った時に15分だったから、30近く気絶していたことになる。

「べ、別に良いわよ／＼。…だってあんなもの食べた後じゃあ心配にもなるわよ。」

それはそうだ。あんなものを食べて無事な人間はいないと思う。

「僕らが気絶した原因って、アレ…だよな？」

「……そうね。アレに違いないわね。瑞希には悪いけど……」

僕らの間に沈黙が流れる。姫路さんは料理音痴だったのか……いや、アレは料理なのだろうか？食べ物の形をしているだけの危険物ではないのだろうか？

「…今度姫路さんに料理を教えてあげたらどうか？島田さん？」

「ウチは遠慮しておくわよ。そこまで得意なわけじゃないし……」

キーンコーンカーンコーン

「っと、もう昼休みはもう終わりね。早く戻りましょう。吉井。」

「あ、まって、島田さん！」

扉に歩いていった島田さん呼び止める。

「良かったら何かお礼でもさせてくれないかな？」

「お礼って…ウチは大したことはしてないわよ。」

「いや、僕の気が済まないだけなんだ。何か食べ物でも奢るよ。どうかな？」

僕が気がつくまで待っていてくれたのだから、それだけのお礼をしたい。

島田さんは少し考えるような表情になった後、

「お礼って訳じゃないけど、ウチのことは美波って呼んでもらえる？ウチはアキって呼ぶから。」

と言った。確かに僕らは互いを「島田さん」「吉井」と呼んでいる。「それぐらい構わないよ。でもどうして？」

「ま、まあいいじゃない／＼。苗字で堅苦しいように呼ばれるのは

何かいやなのよ。」

フランス…じゃなくてドイツの方では名前で呼ぶのが普通だったの
だろう。確かにその方が島田さんっぽい気がする。

「それじゃあ決定！よろしくね、アキ！土曜日はラ・ペデイスのク
レープを食べに行くわよ！」

「了解したよ、美波。それじゃあまたメールするよ！」

名前で呼び合うことにした僕らは、それぞれの教室に帰っていった。

「…これって、デートよね…」

心なしか、鏡の私は赤くなる。

「…楽しみっ」

明日の宿題を忘れてしまうほど、私は舞い上がっていた。

水と塩とお弁当？（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2355/>

バカとテストと召喚獣 'A'nother

2010年10月9日14時23分発行